

飯沼金太郎さん 1. 大空に翔(かけ)た夢

国内有数の民間航空学校・機関学校を設立し、校長として日本民間航空界の人材育成に貢献

航空界の人材育成に邁進(まいしん)した飯沼金太郎



飯沼金太郎

飯沼金太郎といっても、特段の航空ファンを除けば、その名を知っている人は少ないだろう。

飯沼金太郎(以下、飯沼)は千葉県佐倉市出身、日本の航空黎明(れいめい)期の操縦士だった。しかし、1920(大正9)年に参加した飛行競技会にて天候悪化のため墜落、重傷を負い航空界から退くことになる。

その後、期するところがあり、航空界に復帰。中島知久平(※1)の支援をうけ、1932(昭和7)年1月頃、中島飛行機東京工場正門前の豊多摩郡井荻町上井草1595(現在の杉並区上荻4丁目)に、亜細亜航空機材研究所(※2)を設立。この研究所を母体に、翌1933(昭和8)年4月、亜細亜航空学校と亜細亜航空機関学校を設立した。同研究所と両校は、三位(操縦、整備、機材)一体をなしていることと、飛行場の規模・設備・所有機数などの点から、日本の3大民間航空学校(※3)の1つに挙げられている。

飯沼金太郎とは、杉並区に活動の拠点を置いて、国内有数の民間航空学校・機関学校を設立し、校長として日本民間航空界の人材育成に貢献した人物なのだ。

※1 中島知久平(ちくへい)：中島飛行機の創立者で「飛行機王」「巨人」とも称された。衆議院議員、近衛内閣時の鉄道大臣、東久邇宮(ひがしくにのみや)内閣時の軍需

大臣、商工大臣を歴任する

※2 亜細亜航空機材研究所：当初の名前は「航空機研究所」だが、ここでは「機材研究所」とする。

※3 3大民間航空学校：当時の航空専門誌による評価。日本飛行学校、名古屋飛行学校、亜細亜航空学校を指す

憧れの飛行機操縦士に

飯沼は1897(明治30)年、千葉県印旛郡佐倉町(いんぱぐん、現佐倉市)に生まれる。父は佐倉連隊所属の陸軍軍人、母方の実家は清酒「甲子正宗(きのえねまさむね)」で有名な飯沼本家(印旛郡酒々井町)である。佐倉中学校(現、県立佐倉高校)時代から非常に飛行機が好きで、模型飛行機を飛ばすのも学校で一番うまかった。そして友達と模型飛行機の研究をしているうちに、やはり自分で飛びたいとの思いが強くなり、卒業時には操縦士になることを決心する。両親に相談したところ、父は当初、当時の飛行機が危険な乗り物と考えられていたことなどから反対したが、母の説得の後押しもあり了承した。

1915(大正4)年に佐倉中学校を卒業すると、父のつてもあって、臨時軍用気球研究会(※4)所属の澤田秀陸軍中尉の書生となる。そして1917(大正6)年、飯沼20歳の時、念願の帝国飛行協会(※5)第3期飛行機操縦練習生に採用され、翌年5月、晴れて飛行機操縦修業証書を授与。同年11月には、同協会研究生を命ぜられ、以後飛行機の製作や操縦技術の研鑽(けんさん)に取り組むこととなった。

※4 臨時軍用気球研究会：1909(明治42)年7月設置。陸海軍合同の監督下で、気球及び飛行機に関する研究を行う事を目的とした機関

※5 帝国飛行協会：1913(大正2)年4月発足。社団法人で気球、飛行船、飛行機等の航空事業及び自動車等の普及・発達を図ることを目的とした民間機関。現日本航空協会の前身



佐倉中学校時代の飯沼



飯沼と中島式3型複葉機

尾島飛行場に出張 中島知久平の知遇を得る

飯沼は、帝国飛行協会に所属していた1919(大正8)年9月から翌年4月までの8ヶ月間、群馬県にある中島飛行機製作所(※6)が開設した尾島飛行場(現太田市)に出張を命ぜられた。その主な任務は、尾島飛行場に帝国飛行協会専用の格納庫を建設するための工事監督であった。任務のかたわら、尾島飛行場で佐藤要蔵飛行士の指導のもと中島式飛行機の操縦を教わり、また中島飛行機付属の飛行学校(※7)の助教官として操縦教育の手伝いをしている。飯沼は、この尾島飛行場の出張期間中に、社長の中島知久平の知遇を得たが、後に知久平を「オヤジ」と呼ぶほど親交を深め、知久平の人物と信条に感服、共鳴する。また、同製作所には、中島知久平の弟の門吉(後の監査役)と技術者の佐久間一郎(後の取締役・東京工場支配人)、栗原甚吾(後の取締役)が設立時からいた。その後相次いで、知久平の弟の喜代一(後の社長)、乙未平(きみへい・後の副社長)が入所してきた。

飯沼金太郎さん 1. 大空に翔(かけ)た夢

知久平はもとより、いずれ中島飛行機の要職を占める人物達と親交を深めたことは、飯沼にとって何ごとにも代え難い財産となった。後に、航空界に再起するために要する莫大な資金捻出や機器調達などの人脈づくりにおいて、大きな力になったことは言うまでもない。

※6 中島飛行機製作所：当時は日本飛行機製作所。1919(大正8)年12月中島飛行機製作所に改称

※7 後に、水田嘉藤太を校長とする水田飛行学校となる

東京・大阪間無着陸周回飛行競技への参加と事故

1919(大正8)年12月、帝国飛行協会が中島飛行機に製作を依頼した「在米同胞号」(※8)が、翌年2月に完成。3月に同協会に引き渡された。飯沼は同協会として同機の受領と、試験・練習飛行を行なっている。

帝国飛行協会は、東京・大阪間無着陸周回飛行競技を1920(大正9)年4月21日に実施することを決定した。飛行競技には6名が参加予定であったが、機材の都合や事故などがあり、飯沼と山縣豊太郎(やまがたとよたろう)の2人だけの競技となった。

飛行競技当日、中島式7型「在米同胞号」に搭乗した飯沼金太郎、伊藤式「恵美号14型長距離機」搭乗の山縣豊太郎は、洲崎(※9)埋立地を離陸する。だが、飯沼の「在米同胞号」は洲崎を離陸して30分後、天候悪化のため神奈川県丹沢山系大山の西方の山林に墜落し、機体は大破。奇跡的に命は助かったが、左右両大腿骨(だいたいこつ)上部骨折などの重傷で病院に入院する。約10ヶ月に及ぶ療養生活を送ったものの、左足が不自由となった。

飯沼は、この事故で飛行機を操縦することを断念。退院後の1921(大正10)年2月、帝国飛行協会に辞表を提出し、航空界から退くことになる。

※8 在米同胞号：在米日本人の寄付金

により製作された飛行機

※9 洲崎(すさき)：深川区洲崎埋地。現江東区豊洲



飯沼墜落事故の新聞報道



工場内の「在米同胞号」

ボヘミアンと噂(うわさ)された飯沼、意外な才能を発揮

失意の飯沼は、しばらく山梨県下部温泉で療養生活を送った後、かねてから親交のある千葉県津田沼の伊藤飛行機研究所所長の伊藤音次郎のもとに身を寄せる。そこでは、飯沼と帝国飛行協会時代の同期生の後藤勇吉が客員教官として指導するなか、かつての仲間や、後に日本女性飛行操縦士第1号になる兵頭精(※10)が操縦訓練に果敢に挑戦している姿が見られた。訓練に励む仲間を見ているうちに、飯沼は飛べない寂しさが増してきたのか酒の量が多くなった。

その折に、飯沼が絵を描く趣味があったことを知る中島知久平から誘いがあった。知久平は、飛ぶことに命をかけた豪胆で明朗な飯沼の人柄を愛しており、絵を描く道具一式を用意して群馬の尾島飛行場に招き、良く彼の面倒を見たといわれる。1922(大正11)年から1928(昭和3)年の春頃まで、飯沼は主として油絵を描いて暮らしていた。その間、世

間では「ボヘミアンのような生活をしているらしい」などと伝えられたが、いつしかそうした噂も途絶えた。飯沼が航空界に復帰することはありませんでした。飯沼はあり得ないと思われていたからだ。

しかし、飯沼はその期間に、歩きながら聞ける「ラジオ傘」を1926(大正15)年7月頃に考案。それを日本橋の柳川商店から売り出したところ、かなり流行したといわれており、多才な一面を見せている。

※10 兵頭精(ひょうどうただし)：1919(大正8)年11月、伊藤飛行機研究所入所。1922(大正11)年3月、三等飛行機操縦士免許交付。1980(昭和55)年4月、2年越しで入院していた杉並区の救世軍ブース記念病院で逝去

※記事内、敬称略



画家を志す飯沼



ラジオ傘と飯沼(前列左から2人目)

DATA

取材：佐野昭義

写真提供：大谷妙子さん

出典・参考文献は8飯沼は、国及び民間航

飯沼金太郎さん 2. 航空学校・航空機関学校の成立

中島知久平や中島飛行機東京工場などの多大な支援で培った資力をもとに、念願の計画を実行した

飛行機仲間の墜落事故死で航空界復帰を決意

1927(昭和2)年、米国のリンドバーグが大西洋横断単独無着陸飛行に成功すると、日本でも太平洋横断飛行の機運が高まり計画された。その飛行機には後藤勇吉が搭乗することになり、飯沼は支援などのため一足先に渡米を予定した。しかし、後藤がその後の長距離飛行の練習中に佐賀県で墜落事故死したため、飯沼の渡米も中止となった。

すでに、仲の良かった山懸豊太郎や1期先輩で尾島飛行場出張中に世話になった佐藤要蔵も墜落事故死している。飯沼は相次ぐ仲間の墜落事故死に心を痛め、「志半ばで倒れた彼らの遺志を継がなければならない。それは、後進のパイロットを育てることではないか」との思いを強くした。そこで彼らの志を継ぐため、画笔を置き、民間航空の操縦士を養成する学校の設立を目標に航空界復帰を決意する。



亜細亜航空機材研究所1階事務所と飯沼

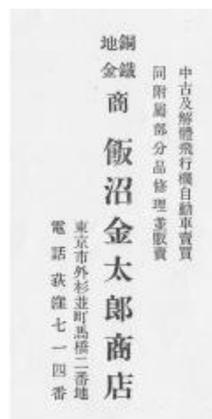


山懸飛行士の慰霊碑
(写真提供：小暮達夫さん)

飯沼商店開店と中島飛行機東京工場の完成

民間航空学校・機関学校の設立には、施設や設備などにかかる莫大(ばくだい)な費用の捻出や、航空行政との絡みもあり、相応の政治力を要する。飯沼は、航空界復帰の目的と必要な資金の捻出などについて中島知久平に相談した。知久平は、かねてから親交のある飯沼の航空界復帰を喜び、多大な支援を行うのである。

それに先立ち、中島飛行機製作所は1925(大正14)年11月、豊多摩郡井荻町上井草(現在の杉並区桃井3丁目)に東京工場を完成。東京工場長に中島喜代一、支配人に佐久間一郎らが就任していた。どちらも飯沼とは旧知の間柄だ。その縁や中島飛行機東京工場との利便性を考え、飯沼は1929(昭和4)年、東京工場にほど近い杉並町馬橋2番地(現在の杉並区梅里)に屑鉄業・飯沼金太郎商店を開店した。業務は、中古や解体した飛行機及び自動車の売買、付属部品の修理と販売である。



飯沼金太郎商店の広告
(帝国飛行協会発行『飛行』より)

中島知久平は、東京工場から大量に出る金属の切削屑(※1)を飯沼金太郎商店に引き受けさせ、無償で譲渡した。これを飯沼は加工業者に転売し、多大な利益を得ている。さらに世の中の情勢が飯沼金太郎商店を後押しした。1931(昭和6)年9月に満州事変が勃発。金屑(※2)が高騰して、商店を一層潤したのであった。

※1 切削屑(せつさくくず)：金属を切り削ることにより出る屑

※2 金屑：金属製品を作る時に出る屑

亜細亜航空機材研究所設立と中島飛行機東京工場の発展

飯沼は商店で得た利益を元に、1932(昭和7)年1月頃、中島知久平の誘いもあって中島飛行機東京工場前(青梅街道を挟んだ向かい)に亜細亜航空機材研究所を設立する。この事業は、次に計画している航空学校などの設立を念頭に置いたものであった。内容は機体の製作・修理組み立て、発動機の分解手入れ及び機材の売買・廃品部品の解体で、作業従業員60余名という大きな工場であった。



亜細亜航空機材研究所

一方の中島飛行機製作所は、1931(昭和6)年12月、合資会社から株式会社に改組し、事業体制の強化を図った。新たな中島飛行機株式会社の社長には中島喜代一、常務取締役に中島乙未平、取締役にも中島門吉、監査役に佐久間一郎、栗原甚吾などが就任した。いずれも飯沼と旧知の顔ぶれである。当時の東京工場は、国産発動機第一号を完成するなど大企業に発展する兆しを見せ始めていた。亜細亜航空機材研究所の設立は、東京工場の発展途上期にあたり、引き受ける金属切削屑が増したことなどから双方の関係は一層深まったといえる。両社の関係は、後に東京工場の技師、前川正男が著書『中島飛行機物語』で「亜細亜飛行学校(原文ママ)」というのがあって、そのトラックが毎日中島の工場(東京工場のこと)の不良品やキリコ(切削屑)を満載して出ていくのを見た。」と、頻りに搬送が行われていた様子を記述しているところからもうかがえる。

民間航空学校・機関学校設立の準備

飯沼金太郎さん 2. 航空学校・航空機関学校の成立

この時期に、飯沼は民間航空学校・機関学校の設立の準備をしていた。そのことを知る中島知久平(※3)や中島喜代一、佐久間一郎らが面倒を良くみてくれたので飯沼の顔も広がった。また飯沼自身、そうした人脈を十二分に活かす才覚と行動力を持っていたため、東京工場以外にも航空局、陸海軍、各飛行機工場などから処分器材を引き受けることができた。飛行機についても、陸海軍と交渉して旧式機を払い下げてもらったりなど、航空学校などの設立前に10数機揃えるという手回しの良さであった。こうして得た器材を整備、貯蔵して、飯沼は次の計画に備えたのである。

※3 当時は衆議院議員。既に中島飛行機製作所の社長を退いていたが、社員から「大社長」と敬意を持って呼ばれるなど大きな影響力をもっていた



亜細亜航空機材研究所の全景と飯沼

亜細亜航空学校・亜細亜航空機関学校の設立

飯沼金太郎商店の開店から約3年半、飯沼は中島知久平や中島飛行機東京工場などの多大な支援で培った資力をもとに、念願の計画を実行した。

1933(昭和8)年4月21日、亜細亜航空機材研究所を母体として、亜細亜航空学校、亜細亜航空機関学校を設立。「亜細亜」の名称は、飯沼が中島知久平のアジア主義に共鳴して名付けたもので、日本以外のアジアからも広く生徒を受け入れて亜細亜一の学校にするという意志を表している。両校の事務所は同研究所に置かれ、機関学校も同一敷地内に設置された。こうして、杉並区に国内有数の民間航空学校の拠点施設が誕生したのである。

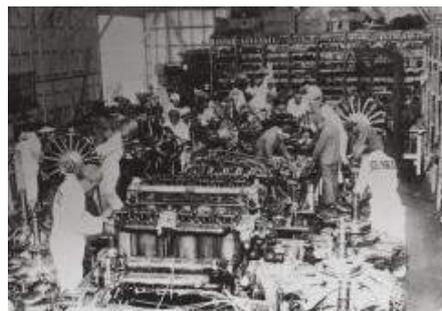
後に、地元建設業者の山崎組などが、中島飛行機東京工場と亜細亜航空機材研究所及び両校の指定請負業者であることを、誇らしげに広告掲載している。そのことから、研究所と両校は、中島飛行機東京工場とその規模・信用度において同列に扱われていたことがうかがえる。



洲崎飛行場における亜細亜航空学校の格納庫と練習機



実習中の教官と航空学生



亜細亜航空機材研究所の工場での発動機整備実習風景

亜細亜航空学校開校式の新聞報道と航空ページの開催

1933(昭和8)年5月22日の亜細亜航空学校開校式には、来賓として井上幾太郎陸軍大将、衆議院議員の中島知久平などそうそうたるメンバーが出席した。来賓からは、規模や設備、整然と並んだ10機の飛行機などに、驚きと賞賛の声が上がった。翌23日の朝日新聞の見出しには「亜細亜航空学校生る一校長に返りさく飯沼君」とあり、飯沼と式

典風景の写真入りで記事が掲載された。記事は、学校長として再起を果たした飯沼の人柄とその開校について好意的に書かれている。

6月4日には、亜細亜航空学校の施設がある洲崎飛行場で、航空知識普及協会主催、航空局・帝国飛行協会などの後援により航空ページントを開催。同校の飛行機の曲技に観衆5万余りは大いに沸いた。同ページントには、井上幾太郎陸軍大将などが出席している。

飯沼にとって、開校式とこの航空ページントは航空界復帰にふさわしく華々しい幕開けとなったが、その心の中はいかばかりのものであったろうか。

山崎組の建築請負広告(『航空時代』より)

亜細亜航空学校の開校

亜細亜航空学校は、1933(昭和8)年5月22日に開校式を行った。校長は飯沼金太郎、教官4名、練習生30余名であった。

主な施設概要は次のとおり。

- ・本部事務所は、豊多摩郡井荻町上井草(現在の杉並区上荻4丁目)の亜細亜航空機材研究所内に置いた。航空学校使用の飛行場は、東京市洲崎5号埋立地(現在の江東区豊洲)32万坪。

- ・格納庫2棟200坪、事務所、倉庫計60坪を建築

飯沼金太郎さん 2. 航空学校・航空機関学校の成立

・飛行可能機 10 機(所有している機数はもっと多い)

同校は、1936(昭和 11)年4月、陸軍大臣認定民間飛行学校に指定され、逓信省航空局委託指定飛行練習生を教育することになり、さらなる教授陣や運営体制の強化を目指した。

亜細亜航空機関学校の開校

航空機の安全運航にとって機体整備は極めて重要である。その航空機器の整備、監視、操作などを行うには高い能力と技術力を要する。それにもかかわらず、当時の民間航空学校に併設されていた機関科は小規模であった。亜細亜航空機関学校は、併設ではなく国内初の独立した民間航空機関士の養成学校として誕生。多くの生徒が入校してきた。

主な施設は、次のとおり。

・本部事務所は、豊多摩郡井荻町上井草(現在の杉並区上荻4丁目)の亜細亜航空機材研究所内に置いた

・当初、同研究所内の 100 坪ほどの工場を使用して実習が行われたが、後にこの工場を 160 坪に増設(※4)し、別に 85 坪の発動機工場を新築した

しかし、同研究所との共用が限界に達したため、1935(昭和 10)年 12 月に板橋区石神井関町1丁目 33 番地(現在の練馬区関町南1丁目1番地)に移転した。

※4 航空専門誌『航空時代 1933(昭和 8)年 10 月号』の記事によると、この増設は 1933(昭和8)年中に行われたようである。正確な期日は不明

※記事内、敬称略

DATA

取材：佐野昭義

写真提供：大谷妙子さん

出典・参考文献は8ページに掲載

飯沼金太郎さん 3. 女性操縦士の募集～両校の廃止

国は戦局に備え、全国の民間航空学校に対し廃止を要求。飯沼の学校も明け渡しを余儀なくされる

女性操縦士志願者募集と女子部開設

亜細亜航空学校は「亜細亜」の名にふさわしく、初年度から満州国(※1)と中華民国の入校生がいた。また、飯沼は女性の操縦士志願者にも理解を示し、航空雑誌などに募集広告を載せる際には女子学生にも入校を呼びかけている。そのこともあって、開校当時からいた馬淵テフ子、徳田雅子に続き、松本キク子、諏訪(すわ)みつゑ、木下喜代子、村上繁子が入校。女子6名となり、なかなかのにぎわいであった。



国内初の女子部開設。上から、馬淵、松本、諏訪、村上、木下

飯沼は1934(昭和9年)6月14日、国内最初の女子部を開設する。この日、日米女流飛行家親善のため来日中であった米国女性飛行家マルジェリー・ブラウンも開部式に参加し、内外に注目を集めた。

飯沼が他校に比べ積極的に女性操縦士志願者を募集し、女子部を開設するなど女性操縦士育成にあたった理由は定かではない。憶測だが、親交のある伊藤音次郎(伊藤飛行機研究所所長)に影響を受けたのではないだろうか。伊藤は、ほかの飛行学校から

「女じゃ駄目だね」と言われて入校を断られた兵頭精を受け入れ、女性操縦士第一号を誕生させた。また兵頭もその期待に応え、懸命な努力のすえに飛行操縦士の夢を貫徹している。そうした伊藤の度量と兵頭のチャレンジ精神を飯沼は直接見ており、そこに女子起用に対する答えの1つがあるのかも知れない。

※1 満州国：1932(昭和7)年から1945(昭和20)年の間、現在の中国東北部に存在した国家

松本キク子と馬淵(まぶち)テフ子、満州親善訪問海外飛行成功



白菊号の命名式。左から松本キク子、1人おいて床次大臣、飯沼



馬淵テフ子に花束を渡す飯沼の長女、妙子さん

松本キク子は、水上飛行機の操縦資格を安藤飛行機研究所で習得していた。しかし、満州海外飛行を計画していたので、陸上飛行機の機種拡張試験(機種限定を変更する試験)に合格する必要がある。そのため、安藤所長が親交のある飯沼に頼み、松本は亜細亜航空学校に入校。飯沼の自宅に寝泊まりして練習を開始する。

1934(昭和9)年10月22日、日本・満州

親善飛行のため、白菊号(※2)に搭乗。羽田を離陸し、11月4日に満洲新京(現在の長春)に到着(※3)、無事成功した。海外飛行を行った日本人女性は、松本が最初である。

続いて、馬淵テフ子も「黄蝶号」(機種は、白菊号と同じ)に搭乗し、同年10月26日に羽田を離陸、11月5日に新京に着陸した。亜細亜航空学校は、女性2人が海外飛行に成功するという快挙を成し遂げたのである。

その後、松本キク子は亜細亜飛行学校の操縦助教官として女子部の教育を担当する。当時22歳であった。

※2 命名は、戦前の衆議院議員、逓信大臣の床次(とこなみ)竹二郎。機種はサルムゾン2A2型機

※3 満州国新京(現在の長春)までに離着陸した飛行場

羽田飛行場→浜松陸軍飛行場(一時機体整備)→大阪木津川飛行場→福岡大刀洗陸軍飛行場→朝鮮半島蔚山飛行場→京城の手前で不時着、陸路京城にて機体整備後→京城飛行場→新義州の飛行場→満州国奉天(現在の瀋陽)東飛行場→新京の飛行場

松本キク子、ハーモン・トロフィー受賞

1935(昭和10)年3月、日本における女性飛行家の第一人者(日本女性飛行家の海外飛行第一号)として、松本キク子は帝国飛行協会から推薦され、フランスの国際航空連盟よりハーモン・トロフィー(※4)授与される。一緒に届いた終身会員証番号は31番であった。なお、その前の30番は、太平洋単独無着陸横断飛行に成功したリンドバークである。

※4 クリフォード・B・ハーモン(国際航空連盟会長)によって1926(昭和元)

年設立。同トロフィーは、その年の優秀な操縦士に贈られる

両校の廃止

1938(昭和13)年6月以降、国は戦局(※5)に備え、民間航空機乗員の大量養成を図

飯沼金太郎さん 3. 女性操縦士の募集～両校の廃止

り、順次、全国に通信省航空局管轄の航空機乗員養成所を設置する。この国策による民間航空機乗員養成の一本化は、既存の民間航空学校を閉鎖に追い込むことになった。1939(昭和14)年8月には、民間航空学校における指定飛行機練習生制度(※6)も打ち切りとなっている。さらにその年の後半より、国は全国の民間航空学校に対し、学校の廃止と施設の明け渡しを要求していく。飯沼の学校も、他の航空学校と同様に閉鎖、明け渡しを余儀なくされる。

同年10月、亜細亜航空機関学校は廃止。翌年5月、亜細亜航空学校建物並びに備品機材一切を帝国飛行協会に寄付し、引き継ぎが完了した。飯沼は、後に亜細亜航空機関学校の廃止と亜細亜航空学校の明け渡しなどを『日本民間航空史話』に事実のみ簡潔に記しているが、その無念さは計り知れないものであったであろう。

飯沼金太郎が再起をかけ、1933(昭和8)年4月に設立した亜細亜航空学校及び亜細亜航空機関学校は、国策によりわずか7年余りをもって閉校となった。飯沼金太郎の民間航空界の人材を育成する志は、ここに途絶えたのである。

※5 1937(昭和12)年7月に盧溝橋(ろこうきょう)事件が勃発。以来戦時色が強くなり、翌年4月国家総動員法が公布される

※6 指定飛行機練習生制度：1936(昭和11)年から実施された制度。各民間航空教育学校長が推薦する生徒を航空局が選抜、授業料減額の特典を与える制度

飯沼のその後

亜細亜航空機関学校廃止後、飯沼は機関学校の設備を利用して、亜細亜航空機器製作所の経営に専念する。同製作所は、中島飛行機東京製作所(※7)の下請け工場として発動機部品を製作することになる。

1945(昭和20)年8月、終戦。当時の日本の航空産業は、戦時中の航空機生産工場の爆撃によって壊滅状態にあり、民間飛行機の製造はもとより飛行機の運航も禁止されていた。飯沼はいろいろと事業を考えたり、米軍

に接收された洲崎の埋め立て地(亜細亜飛行学校跡地)の返却を策し、航空界再起も考えていたようだが、どちらも上手くことが運ばなかった。

飯沼は佐倉の自宅に戻ることになる。佐倉では、好きな酒をたしなみ、趣味の釣りや亜細亜航空学校の卒業生などで運営する「アジア会」に出席するなどして、平穏の中、悠々自適の生活を送った。そして1964(昭和39)年6月、飯沼は家族に看取られながら、その波瀾(はらん)に満ちた生涯を閉じたのである。享年66歳であった。

※7 中島飛行機東京工場は、1937(昭和12)年7月、東京製作所に呼称を昇格変更。のちに荻窪製作所と改称。1945(昭和20)年4月、国は軍需工廠(こうしやう)官制を公布、中島飛行機に対し使用令書等を伝達、第一軍需工廠(長官中島喜代一)として発足する。荻窪製作所は、同工廠第23製造廠となる。

※記事内、敬称略



1940(昭和15)年、民間航空界功労者として通信大臣より表彰される(通信大臣室にて)。飯沼は右奥に着席



晩年に開かれたアジア会。前列左から3番目が飯沼

DATA

取材：佐野昭義
写真提供：大谷妙子さん
出典・参考文献は8ページに掲載

飯沼金太郎さん 4. 飯沼の業績

飯沼金太郎の業績のまとめ

民間航空界の人材を育成・輩出し、その発展に貢献

1933(昭和8)年から1940(昭和15)年までの短期間の運営ではあったが、亜細亜航空機材研究所を母体とした亜細亜航空学校、亜細亜航空機関学校は、操縦・設備・機材が一体であり、かつ飛行場の設備・規模・所有機数などから、日本の3大民間航空学校の1つに挙げられたほど充実した学校であった。中でも、亜細亜航空機関学校は、国内初の独立した民間航空機関学校であるとともに、同校の発動機実習工場の規模は「東洋一」と言われた。

両校は、閉校までに700人から800人に及ぶ民間航空人を育成したといわれている。両校で育成、輩出した人材は、日本民間航空界のすそ野を広げ、その発展に貢献しているといっても過言ではないだろう。その拠点が杉並区にあったのである。

民間航空界で活躍した卒業生

主な卒業生には小田切春雄がいる。陸軍飛行将校となった小田切は、軍に納入する部品検査のため中島飛行機荻窪工場に来ており、工場の技術者達と親交を結んでいる。戦後は日本航空のパイロットとなり、天皇座乗機の機長を務め、1971(昭和46)年常務取締役となり、翌年発生したハイジャック事件を解決に導く。

また、指定飛行機練習生(練習生の中から特に優秀な学生を選抜・学費免除)の小田泰治は、後に日航航務安全保安監査室長となり、安全運航のために優れた手腕を発揮した。

その他にも、亜細亜航空学校は多くの優秀な人材を民間航空界に送り出した。

航空学校初の女子部開設と海外飛行を成功に導く

亜細亜航空学校は他の民間航空学校に先駆けて、女性パイロットを積極的に公募し育成、輩出したことでも注目される。

なかでも、松本キク子、馬淵テフ子は、東京・満州新京間の海外飛行に成功する快

挙をなし遂げている。松本はこの功績により、国際航空連盟から、ハーモン・トロフィーを授与された。後に松本は、日本婦人航空協会理事に迎えられ、航空界に復帰、後進の女性の指導にあっている。

飯沼は、国内で初めての女子部を開設、女性操縦士の育成に理解を示しただけでなく、2人の日本女性初の海外飛行を成功に導いた。日本女性の操縦技術の能力を内外ともに示した功績は大きい。

民間航空界への貢献に対し表彰される

飯沼は、国及び民間航空団体から、これまでの民間航空界の貢献に対し、次の表彰を受けている。

- ・1940(昭和15)年3月、逓信省にて民間航空界功労者として表彰、賞状と金一封贈られる
- ・1940(昭和15)年9月、航空功労者として帝国航空協会より、表彰を受ける

※記事内、敬称略

DATA

取材：佐野昭義

写真提供：大谷妙子さん

出典・参考文献

- 「空のパイオニア・飯沼金太郎と亜細亜航空学校」小暮達夫(AIRFORUM『航空と文化』)
- 「ひとすじのヒコーキ雲-飯沼金太郎の生涯-」小暮達夫(『さくらおぐるま』佐倉市教育委員会発行)
- 『日本民間航空史話』財団法人日本航空協会
- 『飛行家をめざした女性たち』平木國夫(新人物往来社)
- 『巨人中島知久平』渡部一英(鳳文書林)
- 『日本航空史・明治大正編』財団法人日本航空協会
- 『佐倉市史 巻4』佐倉市・佐倉史編さん委員会
- 『航空時代 第7巻4号』航空時代社
- 『練馬区史』編集兼発行者東京都練馬区
- 『中島飛行機物語』前川正男(光人社)
- 『日本飛行機物語・首都圏編』平木國夫(冬樹社)
- 『富士重工30年史』30年社史編纂委員会・社史編纂室
- 『中島飛行機エンジン史』中川良一・水谷惣太郎共著(酣燈社)
- 『生きている航空日本史外伝(上巻)日本のルネッサンス』中村光男(酣燈社)
- 『生きている航空日本史外伝(下巻)日本の航空ミレニアム』中村光男(酣燈社)
- 『戦前という時代』山本夏彦(文藝春秋)
- 『航空博物館とは何か?』水嶋英治(星林社)



愛車に腰掛ける飯沼

飯沼金太郎さん 5.【証言者】小暮達夫さん

飯沼について15年以上に渡り研究を続けている航空史研究家の小暮達夫さんに、飯沼研究に至るまでの経緯と人物像について話を伺った

航空史研究家、小暮達夫さん



小暮達夫さん

杉並に生活の基盤と航空養成学校の拠点
を置き日本民間航空界の人材育成に多大な
貢献をした飯沼金太郎。その飯沼について、
15年以上に渡り研究を続けている航空史研
究家の小暮達夫さんに、飯沼研究に至るま
での経緯と人物像について話を伺った。

初めて知った飯沼金太郎

私は子供のころから飛行機が好きで、その
ことを知っていたかつての上司に「妙経寺
(※)に面白いお墓があるから行ってみな。」
と言われたのです。それが飯沼金太郎を知る
きっかけでした。

お寺に行くと、広い外柵の中に随分大きな
お墓があり、そこが飯沼家の墓所でした。「航
空 飯沼金太郎の墓」とあったのですね。そ
の「航空」の文字を見て「あっ、これだ」と思い
ました。

航空については、かなり知っていると自負
していましたが、航空に関わっていた佐倉市
出身の飯沼金太郎を知らないということは、
ちょっと恥ずかしいと思いましたね。しかし、
当時はインターネットが普及していなかった
ので簡単に調べようがなかったのです。

※妙経寺：佐倉市弥勒町にある寺

凄いことをやった人だ

その思いを持ち続けていたころ、たまたま
芝山(千葉県山武郡芝山町)にある航空科
学博物館の図書室で、航空関係の本を見て
いました。偶然手にした『日本民間航空史
話』をパラッとめくると、出発直前の飛行機
の横に人物の写真があって、それが飯沼金太
郎だったのです。初めて飯沼が大正期のパ

イロットだということが分かりました。それから
は調べが進み、これほど民間航空界で活躍
した人物を、もっと郷土に紹介したいという気
持ちは強くなってきました。それには、飯沼
家のご家族にお会いすれば、もっと詳しいこ
とが分かるのではないかと思ったのですよ。

そこで、妙経寺のご住職にお願いし、ご長
男の飯沼陸彌(むつや)さんとお会いできま
した。陸彌さんからは当時のことに詳しい人
を紹介してもらい、その方から貴重なお話と
資料を見せていただくことができたのです。
それからは、飯沼が墜落した現場の近くや、
飯沼金太郎商店、亜細亜航空機材研究所、
亜細亜航空機関学校、洲崎飛行場の跡地を
訪ね、資料探しに国会図書館などにも行きま
した。いろいろ調べていくと、凄いことをやっ
ていた人だということが分かりましたね。



現在の洲崎飛行場跡地
(写真提供：
小暮達夫さん)

顕彰碑建立と講演会で発表

それまでに調べたことを取りまとめた『ひと
すじのヒコーキ雲』を、陸彌さんにお見せした
ところ、「ここまでよく調べて書いてくれた」と
大変喜んでいただけましたね。しばらくして
陸彌さんのご希望で、私が以前にお贈りした
絵を陶版画にしてはめ込んだ顕彰碑(けんし
ょうひ)を2007(平成19)年に建立すること
になりました。陶版画には、飯沼が東京・大阪
間無着陸周回飛行に挑戦した「在米同胞
号」に搭乗し、飛行する勇姿が色鮮やかに描
かれています。

その後も調べを進めて取りまとめたのが、
2014(平成26)年日本航空協会機関誌「航
空と文化」に掲載され、講演でも発表した「空
のパイオニア・飯沼金太郎と亜細亜航空学
校」という論文です。その講演で、飯沼金太
郎さんのご長女の大谷妙子さんにお会いで

きました。大谷さんとは講演を機会に貴重な
お話を聞かせていただき、また資料を見せ
ていただき大変参考にしております。これか
らの調査研究に活かしたいと思っています。



飯沼金太郎の墓と顕彰碑

杉並は、国内有数の民間航空界 人材育成の活動拠点だった

飯沼の人生は決して順風満帆ではありま
せんでした。時には墜落事故で生死の境を
さまよい、苦勞して設立した学校も戦争のた
めに閉鎖を余儀なくされたのですから。しか
し、生涯を通じて飛行機を愛し、飛行機と共
に生きた魅力ある人物です。

その飯沼は杉並に住み、活動の拠点を区
内に置いて、日本民間航空の人材育成に多
大な貢献をしました。ぜひ、飯沼とその業績
を杉並区の皆さんにも知っていただきたいと
思います。

小暮達夫 プロフィール

千葉県千葉市在住の航空史研究家。
飯沼金太郎の研究については国内における
第一人者。千葉県佐倉市勤務で、公務の
かたわら航空史の研究を続けている。
2014(平成27)年5月19日開催、日本航
空協会主催の航空と宇宙・第263回定例講
演会『空のパイオニア・飯沼金太郎と亜細
亜航空学校』の講師として講演。

著作：『ひとすじのヒコーキ雲—飯沼金太郎
の生涯—』私家版及び佐倉市教育委員会
発行誌掲載 2001年
『空のパイオニア・飯沼金太郎と亜細亜航空
学校』日本航空協会機関誌 AIRFORUM 航
空と文化・2014 夏季号

DATA

取材・撮影：佐野昭義

飯沼金太郎さん 6.【証言者】大谷妙子さん

長女大谷妙子さんから父の思い出や機関学校、洲崎飛行場の様子、中島家との親交などについて話を伺った

飯沼金太郎の長女、大谷妙子さん



大谷妙子さん

飯沼金太郎は亜細亜航空学校、亜細亜航空機関学校の活動の拠点を杉並の事務所にしたが、その2階に長女、大谷妙さんも家族と一緒に住んでいた。そのころの父の思い出や、機関学校、洲崎飛行場の様子、中島家との親交などについて話を伺った。

飯沼金太郎商店と亜細亜航空学校の記憶

杉並時代の記憶があるのは3歳か4歳ぐらいで、青梅街道南側の馬橋にいたころですね。ちょっと手前にお寺がありました。家(飯沼金太郎商店)の前では、鉄くずを焼いて、純粋な鉄とそれ以外のものに分けていたのを覚えています。そのやり方は、中島の荻窪工場から教えてもらったと聞いています。

そのあと中島知久平さんの指針を受けてのことと思いますが、「荻窪に越してこないか」とのお誘いがあった、宿町(現在の杉並区上荻4丁目)に移ったのです。それから、父は駆け足で亜細亜(※1)を立てたのですが、それも知久平さんのおかげですね。

宿町の建物(亜細亜航空機材研究所)は、1階が事務所で、2階に家族が住んでいました。奥には工場がありまして、機関学校の立始めのころはその工場を発動機の整備の実習に使っていましたね。裏には食堂があって、大きな厨房(ちゅうぼう)もありました。女中さんが5、6人いて、大勢の従業員の食事の支度や給仕をしていました。わたくしや母もそこで食事をしていましたね。

しばらくして(昭和10年頃)、荻窪3丁目にあった床次(※2)さんの別荘を購入して、家

族が住むことになりました。一千坪ぐらいありましたでしょうか。そこには、密会と言うことで、大野伴睦(※3)さんと吉田茂(※4)さんが見えました。吉田さんは、わたくしを見て「そばにおいで」とおっしゃって、一緒に写真を撮りましたが、密会ということで、誰かに没収されたそうです。吉田さんは、戦前と戦後2回お見えになりましたね。

※1 亜細亜航空学校、亜細亜航空機関学校

※2 床次(とこなみ)竹二郎：戦前の衆議院議員、通信大臣

※3 大野伴睦(ばんぼく)：衆議院議員、戦後衆議院議長、自民党副総裁

※4 吉田茂：戦前駐英大使、戦後内閣総理大臣



上荻3丁目の邸宅にて
(写真提供：大谷妙子さん)

中島家との親交

父は中島知久平さんに大変可愛がられていたと、母から聞いておりました。知久平さんの弟の喜代一さんや乙未平さんからも同じように良くしてもらったそうです。母は知久平さんの奥さまと大変親しくさせていただき、いろいろとお話をする間柄でした。母は「知久平さんがいなければ、亜細亜は立たなかった」と言っていましたね。奥様と母との女性同士の力、言い換えれば絆でも申しませうか、それも大きかったと思いますよ。

わたくしは成城の女学校を卒業して18歳ぐらいの時、一度、知久平さんの三鷹のご自宅に母とおうかがいしたことがありました。わたくしは年頃でしたので、母が奥様とお茶飲

み話方々、「どこか良い嫁入り先がないかいなあ」という感じでちょこっと話題にしていたね。



飛行機に搭乗、飛行直前の大谷妙子さん(写真左)
(写真提供：大谷妙子さん)

女性操縦士の飛行機に搭乗飛行

洲崎の飛行場には、しょっちゅう遊びに行っていました。飛ぶ前には、飛行機の格納庫脇にあった航空神社にお参りしました。初めて乗ったのは8歳か9歳ぐらいでしたか。パイロットの朴さん(※5)、松本キク子さん、馬淵テフ子さんとか、皆さんに会いたくて本当に楽しみでした。松本さんは小柄でしたが男っぽい方で明るい人。馬淵さんは背が高くて見た目はお嬢さんタイプでしたね。でも話はしっかりしていて、男の工員さんに「なんだ、おまえ」なんてポンポン言っているのを聞いていましたよ。



研究所2階で勉強中の大谷妙子さん
(写真提供：大谷妙子さん)

飛ぶときに一番多かったのは朴さんですが、松本さん、馬淵さんの飛行機にも乗ってもらって10分ぐらい飛びました。当時はフードがなく、顔などに風がビューービューー当たるのが凄かったですよ。飛ばされると大変なので、革のベルトで体を座席にくくり付けまして。でも、ともかく飛ぶのが好きで、怖いなんで少しも思わなかったですね。

飯沼金太郎さん 6.【証言者】大谷妙子さん

※5 朴奉社。朝鮮半島出身。亜細亜航空学校教官、操縦士

航空界の人材育成に邁進(まいしん)した父

父は、お酒好きの明るい性格でしたよ。ジメジメしたことが嫌いで、パツとしたことが好きでした。それと、ジツとしていられない性格だからでしょうか、多趣味でしたね。バイオリン、カメラ、車、音楽などが好きで、何かやり出すともう夢中になるタイプでしたよ。父が航空界に戻ったのは、同期の方とかが3人、飛行機事故で亡くなり、自分1人残りましたでしょう。その方々の志を継ぐためには、自分がやらなければならないと決心したのですね。

それからは、航空界の人材育成をするという志をもって邁進した印象でした。父の志は、亡くなるまで変りませんでした。わたくしは、そうした父の姿を見て尊敬していました。

今でも覚えているのですよ。子供のころ父と歌った亜細亜航空学校の校歌「♪黎明告ぐる 極東の空に～」と、それと口癖のように「おまえも飛行機、好きになってよね。」と言われたこと。そのせいか、わたくしは今でも飛行機が大好きです。飛行機の音が聞こえたり姿が見えると、つい見たくなるのです。どんな方がどのような旅をするのだろうかと思いを馳(は)せるのですよ。



映画撮影機をのぞく飯沼(写真提供：大谷妙子さん)



愛用のコーヒーセット
(写真提供：大谷妙子さん)

大谷妙子さん プロフィール

杉並区在住。90歳。飯沼金太郎さんの長女。

女学校を卒業後、終戦まで2年間中島飛行機東京工場に勤務。空襲で破壊された直後の中島飛行機武蔵工場に行った経験をする。

DATA

取材・撮影：佐野昭義